

ハワイの仏教と日本仏教

——ハワイ開教寺院をたずねて——

木 村 文 輝

一 はじめに

一九九九年九月、禪研究所参禅会の研修旅行でハワイを訪れた。わずか五日間の滞在であり、しかも調査・研究を目的とする旅行ではなかつたが、その間にホノルル市内に位置する曹洞宗別院、本派本願寺（浄土真宗本願寺派）別院、天台宗別院と、ハワイ島にある曹洞宗ヒロ大正寺、およびホノルルのインターナショナル日本人キリスト教会の五カ所を訪問し、それぞれの寺院などで活動状況の概略を伺つた。その内容は、世代交替の波に揺れる移民社会の中で、生き残りの方途を模索する日本仏教寺院の姿を浮き彫りにするものであつた。同時にそれは、日本国内の佛教界

もが等しく抱えていながら、日本ではこれまで顕在化していない諸問題を照らし出すものでもあつた。さらにそれは、宗教の役割の一端を改めて問い合わせをも含んでいるように私には感じられた。そこで、あくまで一介の旅行者の視点ではあるけれども、伺つた話の内容を交えつつ、私自身が研修中に抱いた感想を述べてみたいと思う。

二 仏教教団によるハワイ開教の歴史

まず始めに、日本の仏教教団によるハワイ開教の歴史を、日系移民史との関わりの中でまとめてみよう。⁽¹⁾

よく知られているように、明治時代以来、数多くの日本人が移民としてハワイへ渡つた。そして、その後を追いか

けるように、多くの仏教教団がハワイでの布教を開始した。しかし、その歴史は決して一様なものではない。中牧弘允氏に従えば、移民を中心とする同地での日本宗教の歴史は、

(一) 元年者時代、(二) 耕地時代、(三) 離村向都時代、
(四) 太平洋戦争時代、(五) 都市時代という五つの時代に区分することが可能である。⁽²⁾

(一) 元年者時代は、一八六四年、すなわち明治元年に、横浜を出帆した一五〇余名のハワイ移住に始まる。しかし、三年以内にこの中の五〇余名が帰国し、六〇余名がアメリカ本土へ再移住したため、ハワイには約三〇名が残留したにすぎない。⁽³⁾また、この時代にはまだ日本人宗教家による布教活動は行われておらず、宗教的には空白の時代であった。

(二) 耕地時代とは、日本とハワイの政府間条約にもとづく官約移民の時代(一八八五—一八九四)、民間の移民会社の斡旋による私約移民の時代(一八九四—一九〇〇)、およびその後の自由移民の時代(一九〇一—一九〇八)に相当する。この時代には、合計十万人以上の日本人がハワイに移住し、砂糖収穫地での労働に従事した。その多くは出稼ぎを目的とする単身者であったが、彼らの労働条件や生

活環境は劣悪を極めたため、貯蓄が進まないばかりか、風紀も極度に乱れたようである。

こうした中で、日本人宗教家の活動が開始された。一八八七年、メソジスト教会の美山貫一師が、日本人宗教家として初めてハワイでの布教を行つた。その後まもなくして、仏教関係者も布教を始めるようになる。いわば、この時代はハワイにおける仏教の定着期である。ただし、この時代の布教状況は、さらに二つの時期に区分される。

第一は、宗教家が個人的な資格で布教を試みた時期である。先鞭をつけたのは、一八八九年にハワイへ渡った浄土真宗の曜日蒼龍師であつた。約七カ月間、精力的な布教を続けた曜日師は、本山の援助を仰ぐために一時帰国を決意する。しかし、同師がハワイ政府から布教の許可を得るため、阿弥陀仏とキリスト教の神とを同一視したことが問題となり、彼はハワイへの再渡航を断念した。その後、曜日師と同じように個人的にハワイへ赴いた僧侶が何人かいたけれども、その中には悪行をなす者もあり、移民の間で僧侶に対する不信を募らせる結果になつたようである。

第二の時期は、各教団が組織的な布教に着手した時期で

ある。先陣を切ったのは浄土宗であった。同宗では一八九三年に布哇宣教会を結成し、翌一八九四年には特派布教師を派遣した。さらに一八九六年には、ハワイで最初の正式な仏教寺院をハワイ島に創設している。こうした浄土宗の開教に続いて、一八九七年に本派本願寺、一八九九年に净土真宗大谷派、一九〇一年に日蓮宗、一九〇四年に曹洞宗がそれぞれ開教を開始した。また、一八九八年以降には神道各派の進出も確認されている。

しかし、この頃の布教活動は必ずしも移民に歓迎されたものではなかった。布教師達は夕方に砂糖黍耕地を巡回して説教を行う。ところが、常光浩然氏の『布哇佛教史話』によれば、布教師が訪れても「坊主か、縁起でもない」とか「塩をまけ」と言われる上に、「やつとのことで有志を説得して四人、五人をキャンプの隅っこに集めて説教をする。だが一方では得々然と酒宴をやる。賭場を開く。そんな環境で説教したり、世間話をしたりして時を過ごす」という状態だつたといふ。⁽⁴⁾

けれども、こうした状況を改善させる幾つかの出来事が発生した。一九〇一年、ハワイのリリオカラニ元女王が親

鸞の降誕祝賀法要に臨席した。また、ほぼ同じ頃に、神智学協会のオルコット大佐がハワイを訪れ、キリスト教に対する仏教の優越を説く演説を行つた。これらの事柄をきっかけに、日本人の間に「仏教徒」としての誇りが醸成されたのである。さらに一九〇四年には、オアフ島で発生した日本人労働者の大規模なストライキを本派本願寺の今村恵猛師が收拾した。このことが、耕地経営者達に僧侶蔑視の態度を改めさせるとともに、日本人社会の秩序を維持する上での仏教の役割に気づかせる結果となり、彼らから寺院の建設や経営のための援助が提供されるようになつたのである。⁽⁵⁾

(三) 離村向都時代は、写真結婚などによる、いわゆる呼び寄せ移民以外の新移民の渡航が禁止された時代（一九〇八—一九二四）から、その後の移民の全面禁止の時代を経て、太平洋戦争勃発までの時代に相当する。そして、この頃になると多数の日本人が砂糖黍耕地を離れ、都市に移住するようになる。また、彼らは日本への帰国を諦め、ハワイでの定住を志向するようになつた。そのため、日本人の間でも土地の取得が目指されるようになり、次第に日本

人社会も落ち着きを見せ始めた。こうした状況の下で、ハワイの仏教は発展期を迎える。ただし、その方向性は大きく二つに分かれていたようである。

まず一つの方向性は日本指向の強化である。既に耕地時代から始まっていた仏教寺院による日本人学校の開設が続けられる一方で、一九一〇年代から一九二〇年代には仏教青年会や仏教婦人会、あるいは日曜学校などが各地の寺院で組織された。さらに、それぞれの寺院が茶華道や俳句などの日本文化クラブを主催し、寺院が日本文化継承の担い手として期待されるようになつた。そうした中で、時には特定の寺院が特定の県人会と結び付き、排他性を強めて行く傾向も現れた。その一方で、多くの日本人が宗派の枠を越えて複数の寺院に所属し、日本人社会のネットワークをより強固なものにする結果も生み出された。いずれにせよ、移民達は仏教を日本人のアイデンティティの拠り所とし、寺院を日本人社会の結束の象徴とみなすようになったのである。

それに対して、もう一つの方向性はアメリカ指向の登場である。これは、公教育を通して英語やアメリカ文化、さらにはキリスト教信仰になじんだ二世に対して仏教の布教

を促進するとともに、アメリカ人の間に、仏教をキリスト教と並ぶ宗教として認知させようという二つの目的にもとづくものであつた。とりわけ、本派本願寺はアメリカ指向に積極的であり、日本の行事の中止や簡略化、キリスト教的礼拝様式の採用をはじめ、仏教の英語布教や白人布教師の養成などを率先して行つた。

しかし、こうした二つの方向性の共存からも明らかのように、この頃から日本人社会では、日本指向の一世と、アメリカ指向の二世との間で世代間ギャップが顕在化しつつあつた。同時に二世世代は、日本文化と密接に結び付いた仏教から離れていく傾向を示していた。鷺見定信氏によれば、一九三〇年に浄土宗が行った教勢調査でも、キリスト教が二世の間に浸透していることが既に報告されており、佛教教団には将来の布教に対する不安が広がり始めていたことが窺われる⁽⁶⁾。

(四) 太平洋戦争時代、ハワイではアメリカ本土のようない日系住民のすべてが収容されるという事態は生じなかつた。しかし、ハワイでも宗教家の大多数を含め、日本人の主要な指導者は逮捕抑留された。また、大半の日系宗教施

設は接収され、宗教的な集会は葬儀を除いて全面的に禁止された。仏教開教史における空白時代である。そして、この戦争が二世とそれ以降の世代のアメリカ指向を決定的なものにするとともに、彼らの日本離れと仏教離れを加速させることになったのである。

(五) 戦後の都市時代は、仏教界にとつては復興期である。戦時に抑留されていた宗教家達が次々にハワイに帰還すると、彼らは仏教信仰の立て直しとともに、アメリカに同化する仏教の模索と実践を開始した。具体的には、寺院伽藍の復興、草創期を記念する事業の企画、日本文化クラブや仏教行事を盛り込んだ教化活動の多様化などを推進する一方で、英語による布教活動を拡大し、日本の要素から離れた普遍的な仏教、もしくは、ハワイの実情にあつた独自の仏教を追求したのである。

そうした中で、各寺院の経営は信徒の合議によつて行われる体制が確立し、教団運営も日本の本山の支配から離れ、現地中心で進められるようになった。同時に、砂糖黍耕地の閉鎖に伴い、移民達が耕地から都市へ移住した結果、かつて隆盛を誇っていた耕地の寺院が急速に衰退する事態も

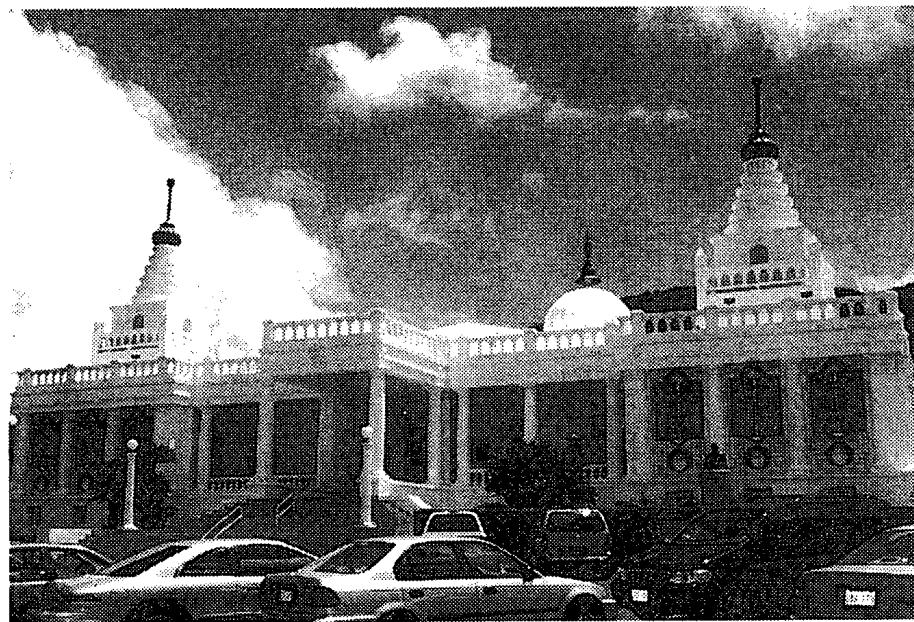
出現した。そして何よりも、日系人社会におけるさらなる世代交替や他民族との混血によつて、日本的な基盤の上で発展を続けてきた日本仏教は、開教活動のあり方に大きな変革を迫られることになった。その一方で、祈祷を活動の中心とする他の仏教教団や、非日系人をも布教の対象とする仏教系の新宗教教団が相次いでハワイに上陸した。とりわけ創価学会などの活躍は、ハワイにおける戦後の成功例として、日系人社会の内外で注目を集めることになるのである。

三 世代交替にもとづく仏教離れ

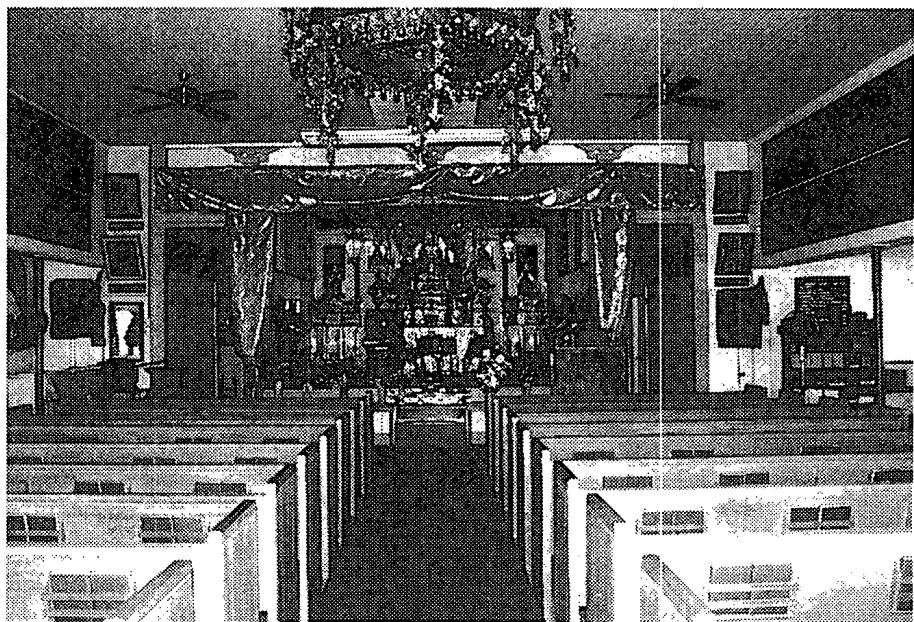
では、このような歴史的経緯の上で、今日活動を続いているハワイの仏教寺院を取り巻く諸問題、あるいは、ハワイの仏教を通して照射される日本仏教そのものが抱く問題点はいかなるものであろうか。曹洞宗別院の町田時保開教監と、本派本願寺仏教研究所のトシオ・ムラカミ師から伺つた話を参考にしながら、これらの事柄に関する私の印象を、特に二つの点にしぼつて以下にまとめることにしたい。



曹洞宗ハワイ別院正法寺
(ブッダガヤの大塔を思わせる建物。1953年建立。)



本派本願寺ハワイ別院
(ガンダーラ様式と呼ばれる建物。1918年建立。)



曹洞宗ヒロ大正寺の本堂内部

（内陣を除き、説教台や信徒席などは
キリスト教の礼拝堂に倣った様式である。）

て、日系人の世代交替に伴う日本語離れ、日本文化離れが進行していることである。既に現地の日系社会は三世、四世を中心とする時代に移つており、場合によつては五世、六世の活躍が始まっている。また、他民族との混血を経て、日系という意識そのものが失われている場合も少なくない。そうした中で、もはや「日系アメリカ人」という枠組みは失われ、彼らは現在のハワイで人口の過半数を占める「アジア系アメリカ人」という、より広い範疇に組み込まれつゝある。それによつてもたらされる「日系社会」の解体は、「アジア系アメリカ人」となつた日系人の日本語離れ、日本文化離れをさらに決定的にしていくだろう。

このことが引き起こす直接的な問題は、日本文化の中に溶け込んでいる日本仏教独自の伝統が、継承され難くなることである。その端的な例が戒名の存在であろう。日系人の日本語離れば漢字文化の消滅をもたらし、それ故に、漢字表記の戒名は理解されなくなつていく。そうなれば、たとえ漢字の意味を説明したところで、読み書きできない文字の戒名に、人々が愛着を抱かなくなることは明白である。また、先祖供養に関わる年回法要や盆、彼岸などの諸行

事、あるいは仏壇や位牌の存在も、継承が難しくなつてゐるものとの典型だと町田師は語つていた。この点に関して、井上順孝氏は『海を渡つた日本宗教』の中で、「祖先とのつながりを大事にするという感覚は、アメリカで生活を営むようになつても、そう簡単に消滅あるいは希薄化しないようである。祖先祭祀の原理自体が、根底からつき崩されつつあるという印象はない」と述べている。⁽⁷⁾しかし、先祖供養の習慣は、もともと仏教の教義そのものに由来するわけではなく、むしろ神道的な靈魂観を基盤とするものである。また、加地伸行氏の説に従えば、それは儒教的な孝の觀念にもとづくものだという。⁽⁸⁾ そうだとすれば、先祖供養は日本的な宗教観や道徳心を前提としなければ、十分には理解され得ないものである。さらに、たとえ日系人が祖先を大切にする感覚を失わなかつたとしても、先祖供養に関わる様々な事柄を從来どおりの日本の姿で継承することには、やはり多くの困難が伴うのではないだろうか。

その一方で、町田師によればお札やお守り、あるいは地鎮祭やお祓いなどは今も変わることなく維持されているといふ。このことは、先に挙げた井上氏も指摘しており、彼

はその理由について「ハワイはポリネシアに属し、ポリネシアは、「タブー」という概念が重要な役割を果たす地域である」。それ故、お札などの呪術的な風習に関しては、「日本人が伝來の宗教習俗を持ち込んだとの他に、ハワイのこうした土地柄を考える必要もあるう」と論じて⁽⁹⁾いる。この点を考慮に入れるならば、先祖供養の諸行事も、ハワイの伝統的な靈魂観と結び付くことによつて、同地で新たな展開を生む可能性をも秘めているように感じられる。

また、井上氏は同書の中で、ハワイで今も「ボン・ダンス」、すなわち盆踊りが先祖供養行事の一環として盛んに行われていることをも指摘している。しかも、そこには世代の壁だけではなく、人種の隔てさえも越えて様々な人々が参加しているという。⁽¹⁰⁾これが、各仏教教団の布教努力の賜物であることは確かである。しかし、おそらくは哀愁感の漂う日本的なメロディーに固執しないことによつて、ボン・ダンスはハワイの文化に溶け込むことが可能になつたのである。

そして、このことは仏壇や位牌にも当てはまるのではないかだろうか。漆塗りに金箔張りの純日本風の様式をハワイ

でそのまま踏襲したところで、ハワイで生まれ育った人々に受け入れられないのは当然である。重要なのは仏壇や位牌の様式ではなく、仏教信仰のための「家庭内礼拝施設」を設けることである。そうだとすれば、キリスト教徒が家中にイエス・キリストや聖母マリアの絵を掲げるのと同じように、家庭内で仏画や名号を掲げ、その周囲に故人の写真などを飾り立てる。そのような簡略な様式の「仏壇」や「位牌」があつてもいいのではないだろうか。

さらに、戒名についても同じことが言えるだろう。ハワイの佛教徒が戒名に対する理解を失った最大の原因是、先にも述べたとおり漢字の使用にある。と言うことは、彼らが戒名そのものに批判的だというわけではないのだろう。むしろ、洗礼名（クリスチヤン・ネーム）をミドル・ネームとして用いるキリスト教文化圏のハワイでは、日本以上に戒名（ブッデイスト・ネーム）が受け入れられ易いのではないか。つまり、ある宗教に入信することは古い自分から脱却し、新しい自分に生まれ変わることを意味する。その際に新しい名前を与えられることは、仏教に限らず他の諸宗教でも広く行われていることである。そのこと

が、ハワイではキリスト教との比較を通して、日本以上に理解され易いように思われるるのである。

ただし、問題はその際にいかなる戒名を選択するのかという点にある。漢字の使用が不適当であることは論を俟たないが、それとともに、戒名の内容にも一考の余地があるだろう。しばしば禅宗で用いられるような、日本的な季節感や山水の情景を連想させる情緒的な戒名が、ハワイで受け入れられるとは思えない。また、居士や信士などという位階の上下を表す戒名が、人間の平等を理念として掲げるアメリカ社会で今後も容認されるとも思えない。むしろ、戒名は佛教徒の象徴だということを第一に考えるならば、浄土真宗が用いるような「釈○○」に近い様式や、東南アジア各地で使用されているようなサン스크リット語やパリ語による戒名の採用も、一つの選択肢となるのではないだろうか。

いずれにせよ、日本語や日本文化から離れつつある新世代の日系人に対して、無批判に日本的な様式を押し付けることは無意味である。ハワイの佛教は、仏教の本質に抵触しない範囲内で日本の様式を捨てる覚悟と、ハワイの文化

になじみ易い新たな様式を模索するべき時代に遭遇しているように私には感じられた。

ところで、先祖供養の諸行事や、仏壇と位牌の存在、さらに戒名の意味などの問題は、日本の仏教関係者にとっても対岸の火事として座視し得る事柄ではない。考えてみれば、日本国内でも核家族の増加に伴つて仏壇のない家庭は着実に増えており、盆や彼岸も単なる休日として仏教的な意味を失いつつある。また、日本で戒名が問題になるのは、いわゆる「戒名料」に関するものばかりであり、時には戒名不要論が公言される状況である。それにもかかわらず、日本でこれらの問題が大きく取り上げられないのは、いずれも日本文化の一環とみなされており、その意味を問い合わせるために迫られていないからである。しかし、人々の仏教離れは日本国内でも確実に進行している。その意味では、現代社会における先祖供養の意義を問い合わせたり、戒名の意味を再確認する作業は、日本とハワイの仏教関係者に等しく求められている課題だと言えるだろう。日本では視線を向けられることのないこうした問題が、ハワイの仏教を通して我々の眼前に改めて突き付けられている思いがする。

ハワイの仏教が直面しているもう一つの大きな問題は、宗教と社会階層との密接なつながりである。アジア系移民が多数を占めるハワイでは、アメリカ本土、特にその東部地域で見られるほどWASP（白人、アングロ・サクソン民族、プロテスチヤント）の優位が顕著ではない。けれども、同じアメリカの一部として、また、歴史的には一九世紀前半にキリスト教を伝えた宣教師達の子孫が、後年「五大財閥」を形成してハワイの経済界に君臨し続けたことなどにより、ハワイでもキリスト教こそが上流階級の宗教との見方は根強く残っている。

町田師によれば、戦時中、仏教徒は「野蛮人」として差別の対象とされていた。そのため、当時仏教は、対外的には「プロテスチヤント」を自称していたという。しかし振り返つてみれば、このような状況はハワイにおける仏教開教が始まられて以来、半世紀にわたって変わらなかつたことである。開教史の中では、先にも触れたように、リリオカラニ元女王の仏教式典への臨席や、オルコット大佐の仏教

四 民族宗教としての日本仏教

講演などを通して、仏教に対する世間の評価が多少なりとも改善された時代がなかつたわけではない。しかし、白人優越の思想と「後進国」日本に対する蔑視、さらには、戦争前夜の対日感情の悪化なども相俟つて、日系人社会と密接な関係にある仏教の評価が根本的に変わることはなかつたであろう。

こうした状況に変化が表れたのは、おそらくは戦後のことをだと思われる。日系人部隊の活躍をはじめとして、日系人達が戦争中に示したアメリカへの忠誠心が評価されたこと、が、結果的には仏教に対する偏見を取り除く一因になつたのではないだろうか。しかし皮肉なことに、彼らがアメリカへの忠誠を強調したことは、彼らがアメリカ指向を強め、日本離れを加速したこと意味していた。つまり、仏教に対する評価が好転しつつあつた時代に、日系人の仏教離れも顕著になつたのである。

ただし、今日に至つても仏教がキリスト教と同列の扱いを受けるようになつたわけでは決してないと町田師は強調する。せいぜい仏教を「野蛮」な宗教とみなす偏見が解消されたにすぎず、仏教は依然として中流階級以下の人々の

宗教だとみなされている。また、各寺院が經營している小学校で仏教教育を標榜すれば、途端に「格下」の学校といふ評価が下され、児童の募集が行き詰まつてしまつという。⁽¹¹⁾ そしてこの背景には、政官界や教育界などで指導的な地位を勝ち得た一部の日系人の陰で、大半の日系人は今だに中流以下の境遇に置かれている現実がある。また、様々な分野で成功を収めた日系人や、これから飛躍を目指す人々の中には、キリスト教徒でないことがアメリカ社会では種々の不利益につながるとして、仏教から離れていく事例も多々認められるという。

だが、それ以上に根源的な要因は、ハワイの各寺院が「仏教寺院 (Buddhist Temple)」としてではなく、「日本寺院 (Japanese Temple)」として現地で認知されている点にあるのではないかだろうか。つまり、ハワイの寺院は今だに日本文化継承の担い手であり、仏教は日本の民族宗教とみなされているのである。かつてハワイ大学のジョージ・タナベ教授が明言したように、「若い世代に分かりにくい日本仏教は、もはやハワイでは外国の宗教として扱われている」⁽¹²⁾ という状況では、仏教がキリスト教と並ぶ普遍的な宗教と

して認められることはないだろう。アメリカ社会に溶け込むことができなかつたことにこそ、仏教がハワイで低い評価しか受けられない最大の原因があると私には思われる。この推測が正しいとすれば、階級意識にもとづく日系人の仏教離れも、実は日本文化離れによるそれと同じ原因に根差していることになるだろう。

こうした状況を打破するためには、やはり仏教が日本の的な装いから脱却し、様々な文化的背景を持つ人々に受け入れられるようなあり方を追求することが不可欠となる。言ひ換えれば、日本文化の伝統とは無縁の、新世代の日系人や非日系人にまで、布教対象を広げる努力が求められるのである。同時に、寺院や仏教教団は、日系人社会の枠にとらわれることなく、地域社会の要請に応えた様々な活動を行うことで、社会との密接な関係を構築していくことも必要だろう。

そして、このような試みに関しては、既に戦前からアメリカ指向を強めていた本派本願寺教団に一日の長がある。現在、ハワイの佛教界では同教団を中心として老人福祉事業に力を入れており、その活躍は次第に社会的な認知を得

つつあるという。また、本派本願寺教団では一九七二年にハワイ大学マノア・キャンパスの隣接地に仏教研究所を開設し、そこで大学生や一般社会人に対する様々なセミナーを随時開催しているという。さらに、浄土真宗の教義を広く普及させるためには、単に英語による布教を行うだけではなく、その方法について多くの工夫をこらしているとのことであつた。

同研究所のムラカミ師によれば、英語布教において特に重要なのは仏教とキリスト教との差別化であるという。例えれば、キリスト教は「愛（Love）」の宗教であるのに對して、仏教は「慈悲（Compassion）」の宗教であると説く。

また、「信心」という語を英語で“Faith”と訳してしまえばキリスト教的なニュアンスが加味されてしまう。“Sushi（寿司）”や“Sukiyaki（すき焼き）”が原語（日本語）のままで英語文化圏に取り入れられたように、“Shinjin（信心）”を英語の中に定着させることによってこそ、「南無阿弥陀仏（Nam Amida Butsu）」を自ら「味わう」意義を広めることになるという。この主張は、確かにそれなりの説得力を感じさせるものである。けれども、寿司やすき焼きのよう

な具体的なものとは異なり、「信心」という抽象的な概念を、日本語や日本文化の伝統とは無縁の人々に、原語のままで正確に伝えることができるのだろうか。正直なところ、私はいささかの疑問を覚えずにはいられなかつた。⁽¹³⁾

とは言え、淨土真宗は阿弥陀仏という絶対者に対する信仰を基盤とするだけに、キリスト教文化圏のハワイにおける布教はそれなりに容易な面もあるだろう。これに対しても、教義上は絶対者を立てず、不立文字を教条とする禅宗が、異文化の地で布教を行うには大きな困難と向かい合うことになる。曹洞宗教団が二〇世紀の初頭以来ハワイでの開教を行ったのは、先祖供養に関わる儀式中心の仏教を同地で採用したり、人々が抱く観音信仰などを利用したからである。厳しい言い方をするならば、これまでの曹洞宗教団の布教は、必ずしも「禪」の布教ではなかつたと言わざるを得ないのである。

しかしながら、今後、日本文化とは無縁な人々に曹洞宗教団が布教を行おうとする場合、従来通りの方法が通用することはあり得ないだろう。また、一九六〇年代のアメリカで「禪」が流行したことがあつたとは言え、その流行が

今も続いていると考えるのは幻想だと町田師は断言する。そうした中で禅の教えを普及させるためには、「禅とは何か」という基本理念、さらには、絶対者に対する他力信仰を説かない「仏教とは何か」という根源的な問いに対しても、平易で明確な回答を提示することが必要になる。「この問題が解決できなければ、ハワイにおける仏教と寺院は消え行くのみだ」という町田師の言葉は、緊張感にあふれたものであつた。

それに加えて町田師は、「僧侶とは何か」という問題も、ハワイで回答を迫られている課題だと述べている。同地でそれが課題とされている理由を、残念ながら私は確認していない。けれども、妻帯して家庭生活を営む日本仏教の僧侶が、世界的な常識では「僧侶」として認め難い存在であることは確かである。言い換えれば、僧侶と在家信者の境界が曖昧になつているのが日本仏教の現状なのである。しかも、淨土真宗を除く日本仏教の各派が表向きは出家主義を標榜している以上、建前と本音を使い分けるという日本的習慣が通用しないアメリカ社会において、日本仏教は論理的整合性を欠いているという謗りを免れることはできな

い。それ故、今後もハワイで布教を続けるためには、少なくとも日本の僧侶の在り方を、日本仏教の立場から論理的に正当化することが不可欠であろう。その上で、仏教の指導者としての僧侶の役割と位置付けを、改めて問い合わせることが焦眉の課題とされるのではないだろうか。

とは言え、「仏教とは何か」とか、「僧侶とは何か」とい

う問題は、単にハワイの寺院とその関係者のみによって解決し得るものではない。確かに、仏教が中流階級以下の人々の宗教だという偏見は、アメリカ社会に特有の問題であり、日本では如何ともし難いかも知れない。しかし、現代の日本において僧侶が結婚している理由や、僧侶と在家信者との相違点などは、日本でもしばしば質問を受ける事柄である。また、近年加速度的に進みつつある科学技術の発展や社会構造の変革、さらには様々なメディアを通して押し寄せる情報の洪水によつて、社会全体が共有してきた旧来の価値観は崩壊し、個々人の生活も変質を余儀なくされている。そうした中で、新しい世界観や人生観の構築と、心の荒廃や利己主義的傾向の拡大などという問題の解決に対し、仏教はいかなる提言を行い、いかなる役割を果たすこと

ができるのだろうか。現代社会との関わりの中で、今、日本でも「仏教とは何か」が問い合わせられているのである。それ故、こうした問題に対し明確な回答を示すことができなかつた時、消え行く運命にあるのはひとりハワイの仏教のみならず、日本仏教そのものだと言つても過言ではないのかもしれない。

五 人と人との絆としての宗教

今回の研修旅行において、仏教以外の宗教施設で唯一訪問したのがインターナショナル日本人キリスト教会（IJC）であった。この教会は、一九八二年に三橋恵理哉師が開いたプロテスチントの単立教会であり、主に日本語を用いて、新たにハワイへ移住してきた「新一世」と呼ばれる人々に対する宣教活動を行つてゐる。⁽¹⁴⁾ 創設以来、教会員数は着実に増えており、これまでに約二百人が同教会で洗礼を受けていることである。しかも、こうした人々の約八割が、ハワイに移住するまでは多くの日本人と同じく「無宗教」人口の一員であり、キリスト教にも特別な関心を抱いていたわけではないという。そうした人々が、なぜハ

ワイでキリスト教信仰に目覚めることになったのか。

三橋師によれば、同教会を初めに訪ねてくるのは圧倒的に女性が多いという。彼女達は、夫のハワイへの転勤にあわせて同地へ引っ越したり、国際結婚などによって新しくハワイでの生活を始めた人々である。ところが、日本での人間関係が断ち切られた上に、不慣れな異国の土地で、日本では自分一人、もしくは子供と暮らす生活を強いられる。

しかも、ホノルルの中心部を除けば、日本語が通用する場所はほとんどない。予想以上に厳しいハワイでの生活を通して、次第に彼女達は社会的にも精神的にも孤立した状態に陥っていく。

こうした人々とその子供達を対象にして、I J C C では

婦人会や英会話教室、あるいは日曜学校などを主催してい

る。また、一二〇組の親子が参加している親子教室は、噂を聞いて集まつた人々によつて、現在空席待ちが出るほど の盛況であるという。けれども、これらの集まりに参加する女性達の多くは、ともかくも日本語で会話をし、同じような境遇の人々と交流をもつことで、日常の閉塞状況を打ち破ることを目的としている。彼女達にとつては、それを

主催しているのがキリスト教会であることはまったく関係ない。教会の側でも、こうした集まりの中では短時間の礼拝を除き、特にキリスト教の宣教を意識するようなプログラムを組んでいないとのことである。

それにも関わらず、これらの集まりを通して他者と接する機会を手に入れ、精神的な安定を回復した女性達の中からは、自然にキリスト教の雰囲気に親しみを覚え、日曜礼拝などにも参加する人が現れてくる。さらに、そうした人々が自分の家族を導くことによつて、家族ぐるみでの信仰と、家族間における新たな絆が生み出されていく。こうして、同教会は小規模ながらも、着実な歩みを続けているとのことであつた。

この話を伺つて、私は宗教が担つてゐる一つの役割、すなわち、人と人との結び付ける絆としての役割を思い知らされた思いがする。私達は往々にして、宗教とは神や仏に対する信仰が中心をなすものだと考える。しかし、人々が宗教に期待し、また宗教が人々を惹き付ける大きな要因は、こうした信仰そのものではなく、むしろ神仏への信仰を名目として集まつてくる人と人との結び付きではないだろう

か。そうした結び付き、言い換えれば人ととの交わりの中で、人々は自らが占めるべき位置と拠り所とを見出し、それを自らの活力源とすることによって、自己の存在に意味を見出す。その時に、人々は自らの存在に意味を与える契機となつた神仏の働きに感謝し、改めて神仏に対する信仰に目覚めるのではないだろうか。IJCCの布教活動の成功は、まさに宗教がもつこのような役割を、見事に実践した結果だと言うことができるであろう。

そして顧みれば、ハワイで日本仏教の開教が成功した原因も、実はそれとまったく同じところに隠されていたように思われる。すなわち、日本人としての自らの拠り所としたのが日本仏教であり、自らの占めるべき位置を確認するためには、日本仏教寺院であつた。彼らは、日本仏教とその寺院に集う人々の輪の中で自らの存在意味を確認し、そうした集いを通して仏教に対する信仰を高めていったのだ。しかし、ハワイで生まれ育つた新しい世代にとつてみれば、自らの存在すべき場所はアメリカ社会の中に見出しどが自然であつた。それ故、彼らが仏教信仰から離れてい

くのは当然の帰結だつたのである。その結果、ハワイにおける日本仏教とその寺院は、これまで述べてきたような信者達の仏教離れに直面することになつた。こうした局面を開けるために、それぞれの寺院では新しい仏教のあり方を模索することで、新世代の日系人や非日系人にも仏教を浸透させることを目指している。

けれども、その試みが必ずしも満足し得る成果を挙げていらない現状において、ハワイのすべての仏教寺院が、一様に同じ目標を指向する必要はないのではなかろうか。もともとキリスト教に関心を抱いていた人々が、ハワイにおける人と人との結び付きを求めてIJCCに集い、やがてはキリスト教への信仰を育んでいったように、仏教寺院も新一世達のこうした期待に応え、彼らの中に仏教信仰の種を蒔き得る可能性を秘めているように思われる。それは、まさに仏教がハワイ開教の草創期に行つていたことの再現にほかならない。いわば、仏教開教の原点に立ち返ることも、将来に対する一つの選択肢ではないだろうか。

現在、日本語を主言語とするハワイでの永住権者は一万二千人ほどであるという。そして、それの人々に対する

日本語による布教活動の需要は、今も増え続けていると三橋師は語る。この言葉は、信者の減少に悩む仏教関係者のそれと対照的である。けれども、同師が率いるI J C C の担つてゐる使命は、かつて仏教寺院が担つていたものと同じである以上、三橋師の言葉はハワイにおける仏教の将来に対しても、一筋の光明を投げかけているように私には感じられた。

六 ハワイ仏教の創造に向けて

これまで論じてきたように、現在のハワイで仏教を布教する際に直面する諸問題は、ハワイ特有のものと、日本の仏教界にも共通するものとに二分されるようと思われる。この中の前者は、日系人の世代交替に伴う日本文化離れや、仏教を中流階級以下の人々の宗教とみなす偏見にもとづくものである。しかしこれらの原因は、突き詰めていければ仏教がハワイの社会に溶け込んでこなかつたことにある。言い換えれば、ハワイにおいても仏教は、過去百年間にわたりて日本の伝統を色濃く残してきたのである。確かに、それは日系移民達が求めてきたものであつた。しかし、日

系人の世代交替が進むとともに、日本的な要素に対する需要は低下していく。それに合わせて、仏教も新しい姿に変化していかなければならぬ。

私は以前、一五世紀に仏教の伝統が途絶したインドネシアにおいて、半世紀にわたつて仏教の復興を指導してきた比丘に面会した。その時に、この比丘が「ここはインドネシアだ。インドネシアには、その精神風土に適した独自の仏教があつてもよい」と語り、大乗仏教と上座仏教の垣根さえをも越えた独自の仏教を創造する自負をのぞかせていたことを思い出す。⁽¹⁵⁾これと同じことは、まさにハワイでも言えるはずだ。ハワイの人々が受容し難いような日本的要素を切り捨てるとともに、たとえ上座仏教やキリスト教の要素でも、有益なものは取り入れてもよいのではなかろうか。そうすることと、「ハワイ仏教」とも呼ぶべきハワイ独自の仏教形態が生まれた時、仏教ははじめて日本の宗教ではなく、ハワイの宗教の一つとして現地で受け入れられることになるだろう。⁽¹⁶⁾

しかし、ここで問題となるのが、仏教の変容を指導すべき布教者である。もちろん、現在もハワイで数多くの開教

師の方々が、日夜努力されていることには頭が下がる思いである。けれども、仏教各派は未だハワイで布教者を養成する独自の機関を設立しておらず、開教師達の多くは日本から派遣された人々である。

その結果、長年にわたってハワイの日系人社会の中で生きてきた人々と、開教師達との間に意識のズレが生ずることとは避けられない。また、日系人社会に存在する世代間のギャップを開教師達が正確に把握し、それに対する十分な対応ができるとは限らない。しかも、他民族との混血が進み、日系人と非日系人の区別さえもが意味を失いつつあるハワイにおいて、そのような混成民族の社会を初めて経験する開教師達が、民族の枠組みを越えた布教活動を実現できるのであろうか。そして何よりも、日本で生まれ育ち、日本で布教者としての訓練を受け、時には一定の期限付きでハワイに派遣されている開教師達に、日本文化の桎梏から離れた「ハワイ仏教」を創造することが可能であろうか。

このように考えた時、やはり「ハワイ仏教」は、ハワイに生まれ育った人々のみが生み出し得るものではないかとう思いにとらわれる。

さらに、この布教師の問題は、制度的な面でも種々の課題を含んでいるように思われる。⁽¹⁷⁾ その中でも特に大きな事柄は、教団運営に関わる問題である。日本のように檀家制度が存在しないハワイでは、開教師と信徒との関係が極めて流動的であるという。また、ハワイの各寺院は信徒の中から選ばれた理事の合議制によつて運営されており、開教師は寺院運営の権限や責任を与えられていないばかりか、時には開教師の進退が理事会の決定によつて左右されることもあるという。そのため、たとえ開教師が「ハワイ仏教」の創造を目指したとしても、「私達の寺」の伝統を守ろうとする信徒達の壁を乗り越えない限り、いかなる改革を行うこともできないのである。

その上、開教師の報酬も理事会によつて決定されることになつてゐる。ところが、僧侶は利潤の追求を行う者ではなく、清貧の理念に生きる者だと考えられているためなのか、極めて低い報酬しか認められていないようである。聞くところによれば、家族を伴つて開教活動に従事している者の中には、ハワイ州政府の生活補助に頼らざるを得ない者もいるという。このような状態では、優秀な開教師を数

多く集めることは困難であろう。仏教各派が海外における開教事業の発展を目指すのであれば、少なくとも開教師の報酬に関する限り、それぞれの教団本部が援助を与えることはできないのだろうか。

そして、教団本部の関与に言及するならば、日本の仏教界は現代社会に通用するような仏教教義の再構築に、一刻も早く取り組むべきである。すなわち、戒名とは何か、先祖供養とは何か、僧侶とは何か、さらには仏教とは何かという問題に対し、論理的に整合性のある明確な回答を準備しなければならない。しかも、これは単にハワイで仏教を布教するための問題ではなく、日本の仏教界自身に求められている課題なのだ。現在の仏教界を取り巻く諸問題の本質は、ハワイにおいても日本においても基本的には共通していると言つても過言ではない。⁽¹⁸⁾ 日本の仏教界は彼の地の事情を鑑しながら、自らの姿を省みる必要があるのではないだろうか。

注記

(1) ハワイにおける日系諸宗教の活動は、一九七七年度と一

ハワイの仏教と日本仏教（木村）

九七九年度に東京大学宗教学研究室が現地調査を行つており、その成果は柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系宗教の展開と現況——ハワイ日系人宗教調査中間報告——』（東京大学宗教学研究室、一九七九）、柳川啓一・森岡清美編『ハワイ日系人社会と日本宗教——ハワイ日系人宗教調査報告書——』（東京大学宗教学研究室、一九八一）にまとめられている。なお以下の記述に際しては、この両書のほかに、井上順孝『海を渡つた日本宗教——移民社会の内と外——』（弘文社、一九八五）、曹洞宗ハワイ開教総監部編『曹洞宗ハワイ開教七十五年史』（曹洞宗宗務庁、一九八〇）、常光浩然『布哇仏教史話——日本仏教の東漸——』（仏教伝道協会、一九七一）、中牧弘允『日本宗教と日系宗教の研究——日本・アメリカ・ブラジル——』（刀水書房、一九八九）を参考にした。

(2) 中牧前掲書、二三八一二五頁。

(3) 新保義道『ハワイ開教九〇年史』（山喜房佛書林、一九八七）二六頁による。

(4) 常光前掲書、一四三一一四四頁。

(5) 常光前掲書、一四六一—四八頁。

(6) 鷺見定信『『開教区記録』にみられたハワイ浄土宗』『宗教文化の諸相』（竹中博士頌寿記念論文集、山喜房佛書林、一九八四年）一二七三—一二七四頁。

(7) 井上前掲書、八三一八四頁。

(8) 加地伸行『儒教とは何か』（中公新書、一九九〇）一六一

二二二頁。

(9) 井上前掲書、九一—九二頁。

(10) 井上前掲書、八二—八三頁。

(11) 町田師によれば、曹洞宗別院の収入内訳として、布施と護持会費と学校収益がそれぞれ約三割を占めているという。

(12) 原文は筆者未見。飯島尚之「ハワイにおける日本仏教——歴史的流れを追つて——」『教化研修』三九（一九九六）二五〇頁による。

(13) 異なる言葉によつて仏教の教義を正確に伝達できるのかという問題は、開教師の間で共通の悩みになつてゐることを井上順孝氏が報告している（「ハワイ日系宗教の模索とジレンマ——言語問題を中心にして」『現代宗教への視角』雄山閣、一九七八、一九二頁）。

(14) 同教会では一九九七年に、「I J C C 一五周年記念誌」として『天国のハーモニー——継承と紛——』と題する小冊子を発行している。

(15) インドネシアの仏教復興に関しては、拙稿「インドネシアの仏教復興とその現状」『愛知学院大学短期大学部研究紀要』八（二〇〇〇）を参照されたい。

(16) 井上順孝氏は、浄土宗のある開教師が「ハワイの仏教の将来について、仏教のキリスト教化と仏教の本来の仏教化との相互作用によって「ハワイ仏教」というものができ上がつていくであろうし、またそうでなければ仏教はハワイでは生

き残れないであろう、と語つていた」ことを報告している（井上前掲論文、一九二頁）。

(17) 飯島前掲論文、二四八頁、井上順孝「ハワイにおける日本宗教の変容」『ジュリスト増刊総合特集 現代人と宗教』（有斐閣、一九八〇）一九一頁、中野毅「法的側面からみたハワイ日系教団」『宗教研究』五二（四）（一九七九）五八—五九頁を参考にした。

(18) これと同様の視点を、飯島尚之氏は次のように述べている。「開教当初から今日まで、ハワイ日系仏教が直面している諸問題は、急速な文化変容が進む日本社会における仏教のありようについて、極めて示唆的かつ現実的な要素を多分に含んでおり、言うなれば、開教寺院はまさに「アンテナ・ショップ」的要素を持つと言つても過言ではないからです。」（飯島前掲論文、二四七頁。）

追記 本稿の記述にあたつては、文中に御芳名を記した曹洞宗別院の町田時保師、本派本願寺仏教研究所のトシオ・ムラカミ師、インター・ナショナル日本人キリスト教会の三橋恵理哉師のほかにも、研修旅行中に訪問した天台宗別院の荒了寛師、本派本願寺別院のシゲノリ・マキノ師、曹洞宗ヒロ大正寺の秋田新隆師と同寺の護持会員の方々から伺つたお話しを参考にさせていただいた。記して謝意を表します。しかしながら、一切の文責は筆者にあることを念のため申し添えます。